



Title	箏・わざ・産業
Author(s)	平田, 勉
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2302
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	平 田 勉
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 18000 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 15 年 3 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	こと 箏・わざ・産業
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 山 口 修 (副査) 教 授 根 岸 一 美 教 授 天 野 文 雄 佐賀大学文化教育学部教授 田中 健次

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本における箏生産の 70%を占める広島県福山市で箏製作に携わる職人たちが伝承する「匠のわざ」を軸におき、箏の歴史や音楽を概略しつつ、「わざ」が創出される現場やその応用的意義について明らかにするものである。具体的には、培われた「匠のわざ」による古代琴の復元、および教育用邦楽器「新福山箏」の開発の双方に参画した著者の経験に照らし合わせて、箏という楽器が未来に伝承されるための産業のあり方についても言及しており、工学と楽器学、そして産業学にまたがる学際的な研究である。

本論文は七章で構成される。まず第一章「古代のコト」では、古代琴発掘の諸事例を網羅的にあつかい、古代日本のコトと音楽について独自の見解を導き出す。すなわち、全国の遺跡から出土した古代琴の諸相を概略したうえで、日本古来の楽器と音楽の関連性を明らかにする。とくに古代琴を形態上から新しく四種に区分し、第四の分類である「箱作りの琴」を独立した形態として位置づける。第二章「箏という楽器」では、近世以降の箏に関する共通知識、技術情報を述べるべく、箏という楽器のあらまし、用いられる材料、製作工程を詳細に解説する。第三章「コトの音楽」は、箏という楽器が音楽と深くかかわりあい、相互に発展してゆく過程をたどる「箏曲史」であり、雅楽、寺院歌謡、法会雅楽、箏曲、三曲などの音楽とその歴史を投影しながら日本におけるコトと音楽の発展経路を詳述する。そこでは、いわゆる近世邦楽の変遷を楽器とその演奏家との関連において考察し、始祖的役割をはたした 17 世紀の八橋検校から 20 世紀の宮城道雄にいたるまでを俯瞰する。第四章「福山と箏」では、箏の主たる材料キリ材の産地でもないし、また大きな消費地でもない福山に、なぜ箏産業が誕生して隆盛していったかを福山にまつわる地域性、産業特性、材料特性、気候風土・歴史について論じる。第五章「コトにみる職人のわざ」では、「古代琴の復元」を既往の復元琴と比較考察したうえで、福山箏職人の手による箏作りの「わざ」を浮き彫りにする。第六章「箏産業の課題」では、今日の箏産業の現状を俯瞰して、箏産業活性化の振興施策と販売普及活動を検証しつつ、これからの箏産業の展望について論じる。とくに「新福山箏」の開発について、そのプロセスと開発内容を詳述し、楽器開発による産業の活性化の可能性について考察する。その結果、楽器が音楽や産業と相関的に発展することが判明した。終章の第七章「もの作りにおける『わざ』」では、福山琴（箏）職人が永年培ってきた箏作りのわざを祖上にのせ、そこから「わざの三要素」を提示して検証をおこなっている。

(分量 本文縦書 176 頁 400 字詰原稿用紙換算約 530 枚 参考文献、日英長短要旨等 33 頁)

論文審査の結果の要旨

手を中心とした身体から新たな文化を創生し展開するうえで大きく作用しているのは、「わざ」である。しかし、「わざ」を「学」の対象とすることは少なく、また難しい課題であるが、果敢にこの問題領域に取り組んだ本論文は特筆に価する。著者は、地域の産業振興を担う公設試験研究機関の研究者として箏産業の活性化を目指し、究極的には箏文化の創造を実現するための具体的な行動計画までに論述が及んでいる。その意味では、本論は「楽器学」「音楽学」「産業学」と三つの領域にかかわる学際研究である。結果として、箏が連綿と続いてきた背景には、楽器として音楽としてそしてその相互関係においても「わざ」が根底にあったことを具体的に示すことに成功している。また、一般に「わざ」が文化創造の重要な一端を担うものであり、これからの産業活性化には「わざ」を明示的に活用することが必要であることを論じており、社会的に貢献する見解が示されている。

すなわち、本論文で論じようとした研究の内容は、楽器と音楽の双方で「わざ」がすべてに関連しているとの仮説を立て、工業技術者の視点と考察から、楽器の材料、製作技術、演奏技術に「わざ」というフィルターを通して論じようとした意欲的な研究である。

しかし、「わざ」を学にするまでの体系的な論理を構築しようとするあまりに、それぞれの章であつかう論点がやや浅薄なものになっているのが、本論文の問題点である。しかし、この短所は本論文に続く研究により逐次補うことが可能であり、学界に対する貢献度の高い本研究の価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。